方　　面	九都県市合同防災訓練	（1面）
1 師 団	第１師団オープンフェア	（2面）
12 旅 団	第１次旅団訓練検閲	（3面）
1施設団	団長初度視察	（4面）
混 成 団	災害派遣	（5面）

あづま

令和８年１０月２５日　第１１０１号

総監統率方針「強靭な東部方面隊の創造」
総監要望事項「一隅を照らせ」

陸上自衛隊東部方面隊広報紙
発行所：方面総監部広報室
住　所：東京都練馬区大泉学園町
専用線：8-37-2446

相互連携強化を図る
九都県市合同防災訓練

九都県市合同防災訓練は、各都県市地域防災計画に基づき、防災対策の習熟と災害発生時の迅速かつ適切な応急・復旧対策における技能を高め、防災関係機関との相互の連携強化を図ることを目的とした合同防災訓練であり、内閣府と連携した合同訓練（以下「本会場訓練」）及び各都県市以下で実施する訓練に区分され、昭和55年から実施されている。

本会場訓練は東京都、千葉県、埼玉県、神奈川県、横浜市、川崎市、千葉市、さいたま市、相模原市の持ち回りにより行われ、今年度は神奈川県で実施された。当日の訓練は東部方面隊設群並びに協同部隊として第1飛行隊が参加した。また、訓練会場には内閣総理大臣及び政府関係者が来場し、訓練を視察された。本防災訓練への参加を通じて、災害対処に係る陸上自衛隊の救出・救助能力等の一部について広く周知するとともに、自治体及び関係部外機関等との連携を強化する等、組織の垣根を越えて災害対処に係る実効性を向上させることができた。

訓練終了後、参加部隊は、防衛大臣より激励を受けるとともに、総監からは、「本日の訓練により国民に安心感を与えることができたと認識している。一日一日の平和を積み重ねることが我々の任務であり、これを実感しつつ、今後の訓練等に励んでもらいたい」との訓示があり、参加部隊一同、その期待に応えるべく、今後の更なる任務遂行への決意を新たにした。

関連＝②面


救出救助訓練


消防との連携

海上輸送群の輸送艇
「あかね」命名・進水式



進水のためクレーンで吊りあげられる輸送艇「あかね」

方面隊は9月17日、ジャパン・マリン・ユナイテッド株式会社横浜事業所鶴見工場において輸送艇「あかね」の命名・進水式を実施した。

自衛隊海上輸送群が運用する輸送艇の建造に伴うもので、総監が執行者となり、部隊の任務遂行の基礎醸成を図ることを目的として行われた。命名式では、若林政務官が防衛大臣の命名書を読み上げた。引き続き行われた進水式では、政務官による支綱（しこう）切断の後、クレーンによる吊り上げ及び移動を経て進水した。輸送艇「あかね」は、主として島しょ間における部隊や補給品の輸送を担う予定で、船体を砂浜や海岸に乗り上げるビーチング能力を有している。これにより、他の輸送艦では接岸が困難な場所への輸送も可能となる。

今後、島しょが多数点在する地域において、他の輸送艦と連携した迅速かつ確実な輸送により、我が国の島しょ防衛に寄与することが期待される。同艦は今年度末に就役を予定している。

本格的に推進開始
上曹でＷＰＳ教育

方面隊は9月10日、板妻駐屯地において第3陸曹教育隊の第239期上級陸曹課程の被教育者160人に対し、女性・平和・安全保障（ＷＰＳ）教育を実施した。

本教育は陸自として取り組んでいるＷＰＳについて、基本教育により必要な知識を付与するとともに、討議等により資質を涵養し、上級陸曹として必要な各種活動へのジェンダー視点の反映に係る概要を修得させることを目的としている。

本教育はＷＰＳに関する基礎知識の導入、災害やＰＫＯ等の事例研究、部隊等へのジェンダー視点の反映について、総監部防衛部防衛課のＷＰＳ班長による教育を実施した。また教育資料を事前配布することにより、あらかじめ重点を把握した上での効率的な教育とすることができた。

教育終了後、参加者から「ＷＰＳの重要性を改めて認識することができた。また、これまでＷＲＳ（女性意見反映業務）等との違いが理解できなかったが、本教育を受けたことにより、理解を改めることができた」「女性だけのための取り組みと認識していたが、紛争・災害時に脆弱な立場に置かれやすい高齢者や児童にも着目し、配慮する視点が重要であると感じた」「相手の立場に立った配慮や思いやりの視点だけでなく、作戦の実効性向上という観点について知見を得ることができた」「グループ討議において過去の災害派遣の経験や、他の学生の意見交換を通じて、ＷＰＳに関する理解が深まる有意義な討議ができた」「今後は学んだことを生かし、上級陸曹として弱者に寄り添った対応がとれるよう努力していきたい」などの意見が上がった。


ＷＰＳ班長による教育

炎上車両から女性救出
3曹教　澤田1尉に感謝状

単独事故を起こし炎上した民間車両から運転手の女性を救出したとして、第3陸曹教育隊第1普通科教育中隊長　澤田1尉に対し静岡県三島警察署及び駿東伊豆消防本部田方北消防署から感謝状が贈られた。

澤田1尉は8月5日の出勤途中、静岡県内の県道において、ガードレールを突き破り転落して炎上している軽自動車を確認するや、速やかに車内から女性を救出し、駆けつけた警察官と連携して安全な場所へ移動させるとともに、近隣家屋への声掛け及び交通整理を実施した。

澤田1尉は「事故に遭遇した際、車両左前部は燃えていたのですが、まだ運転席側に大きく火は回っていなかった。その時であれば運転手を救出できると思ったので最低限の安全を確保して救出を行いました」と当時の様子を振り返った。

救出された女性はろっ骨を折るけがをしたものの、命に別条はないということで、危険を顧みず国民の命を救った澤田1尉の行動は、教育部隊の中隊長として隊員の模範となった。



感謝状を贈られる澤田１尉

デジタル版あづまのご案内

東部方面隊は今後ＤＸ（デジタルトランスフォーメーション）化を進めてまいります。
東部方面隊広報紙「あづま」はスマホやパソコンでいつでもどこでも見ることができるデジタル版でご覧になることができますので、是非ご覧ください。

X　Instagram　facebook　ＨＰ

第１師団

第1師団オープンフェア

陸自全16職種が集結

一人一人に寄り添う募集広報


リアルな生活環境の見学


各種装備品の展示・説明



イベントモニュメントのエアアーチ


戦闘糧食の体験喫食



職種の魅力について説明


案内をするアテンド要員

師団は8月22日及び23日の2日間、方面募集期間に連携した募集広報イベント「第1師団オープンフェア」を練馬駐屯地において開催した。

本イベントは募集対象者に対して陸上自衛隊の「本物の装備品・隊員のリアルな生活」に直接触れる機会を設定するとともに、職種や人事制度等の説明を通じ、募集対象者に陸上自衛隊を職業選択の一つとして検討してもらうことを目的として実施したものである。

本イベントにおいては陸上自衛隊全16職種の装備品等が一堂に集結した「職種・装備品説明」、リアルな勤務・生活環境を見学、体感できる「オフィスツアー・生活体験」、駐屯地食堂における戦闘糧食の「体験喫食」、自衛隊の多種多様な採用区分や職種、進路について説明する「キャリアパス」が駐屯地全域を使用して実施した。

「我々の後輩は我々の手で」を具現化するため、参加者一人一人に対して部隊の若年隊員等をアテンド要員として募集対象者にマンツーマンで配置した。アテンド要員は各イベントの案内を通じ、自身の言葉で自衛隊や職種の魅力、仕事のやりがいを直接募集対象者に伝え、自衛隊をより身近に感じてもらう機会を提供した。

参加者からは「案内してくれた担当の自衛官がとても良い対応で素晴らしかった」「駐屯地内のリアルな生活を肌身で感じることができた」などの声が聞かれ、自衛隊の仕事や生活環境に対する理解と関心の向上につながった。

延べ2日間で募集対象者338人、保護者等81人の計419人が参加し、新たな募集対象者の情報獲得に加え、志願者や合格者等に対してはフォローアップにも活用され、自衛隊に対する理解と関心、志願意欲の向上に大きく寄与した。

師団は今後も自衛隊の魅力や親しみやすさを発信し、募集対象者の自衛隊に対する理解・関心を深めるとともに、将来の進路を考えるきかっけとなる募集広報活動を積極的に推進していく。

全日本青年銃剣道大会で躍動

1普連　準優勝に輝く



決勝の防大戦


準優勝（1普連Aチーム）
先鋒　佐藤3曹　　中堅　佐藤士長
大将　宇良士長　　監督　土屋2曹

第57回全日本青年銃剣道大会が8月7日、日本武道館で行われ、第1普通科連隊Aが青年2部で準優勝に輝いた。

青年2部（23歳以下）では全国から3名1組で編成された118チームが出場し、団体戦でその頂点を目指した。第1普通科連隊Aは順調に勝ち上がり、決勝戦に進出することとなった。

決勝戦は近年着実に実力をつけてきた防衛大学校Aと対戦した。先鋒、中堅が敗れた中、大将の宇良士長は奮起し、見事2本勝ちを収め、第1普通科連隊の底力を見せつけ準優勝に輝いた。また第1普通科連隊Bが第3位、第32普通科連隊と第34普通科連隊が第5位に入賞し、師団勢が上位を占める結果となった。

第1普通科連隊Aの大将を務めた宇良士長ら選手は「優勝まであと一歩届かなかったことが悔しい。今回の大会で見つかった課題をこれからの練習に生かし、この結果に満足することなく、来年は必ず優勝します」と力強く語った。

九都県市合同防災訓練

大規模災害に備え関係機関と連携


消防隊員と現場で連携要領を確認


切断工具で倒壊建物の壁を切断


リペリング降下を支援（第１飛行隊）

師団は8月29日及び9月1日の両日、埼玉県及び神奈川県で実施した第47回九都県市合同防災訓練に第32普通科連隊と第1飛行隊を参加させた。

本訓練は昭和55年に六都県市による訓練として実施され、平成22年からは現在の九都県市（埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県、横浜市、川崎市、千葉市、さいたま市、相模原市）による総合防災訓練として実施されている。

埼玉会場である埼玉県熊谷スポーツ文化公園では、合同指揮本部の設置・運営を実施し、自治体や消防、警察などの関係機関と被害状況等を共有したうえで、災害対処に向けた諸調整を行った。救出救助訓練では会場に設置された模擬家屋において、人命救助セットのエンジンカッターを使用して倒壊建物の壁を切断し、救出活動を行うなど現場の状況に応じた救出要領を演練した。

神奈川会場である神奈川県総合防災訓練センターでは「ビッグレスキューかながわ」と称し、大規模な訓練が実施された。この中で第1飛行隊は第31普通科連隊の隊員によるリペリング降下を支援し、災害対処活動の能力向上に大きく貢献した。

両会場での訓練を通じ自治体、消防、警察等の関係機関との連携要領を演練し、大規模災害発生時の迅速かつ的確な活動に必要な手順を確認した。訓練の成果を今後の教育・訓練に反映し、災害対処能力向上につなげていく。

HMG対空実射訓練

六ケ所で実射　対空実射の練度向上


対空実射を視察する副師団長


HMGによる対空射撃

師団は8月30日から9月10日までの間、青森県の六ケ所対空射撃場において、HMG対空実射訓練を実施した。本訓練は第1後方支援連隊長を担任官として、師団隷下部隊及び大臣・方面直轄部隊の基幹要員が参加し、12・7㎜重機関銃の対空射撃練度の維持・向上と指導者の練成を目的として行われた。

射撃は組長、射手、弾薬手の3名1組の編成で実施され、組長の射撃指揮のもと、弾薬手の射撃補助を受けた射手は、移動目標に対し正確に照準し、指定された射法により射撃を実施し、組内の連携要領を向上させた。

師団は本訓練を通じて対空射撃練度の向上を図るとともに、各部隊の対空戦闘に必要な知識・技能を指導する隊員を育成した。

第１２旅団

第1次旅団訓練検閲

協同部隊で戦闘力の組織化を

旅団は8月18日から9月13日までの間、北海道矢臼別演習場において北海道トレーニングセンター訓練（ＨＴＣ訓練）に参加し、これを令和8年度第1次旅団訓練検閲として実施した。

本訓練検閲では第13普通科連隊を受閲部隊として、増強した普通科連隊と諸職種による協同部隊の戦闘力を組織化し、実戦的に演練して任務遂行及び対処能力の向上を図った。

参加部隊は8月中旬からフェリーで長距離移動し、現地において訓練準備を完了した。

25日の訓練開始式は矢臼別演習場と相馬原駐屯地の指揮所をオンラインで接続して実施した。旅団長は訓示において①指揮の要訣の実践として作戦環境の複雑化や高速化を認識し、時期を失しない状況判断と積極果敢な決心を促し、確実な状況と、その特性の把握に努め、推移に応じた状況判断による企図の徹底②戦闘力の組織化として従来の領域はもとより、サイバー等の認知領域に至るまで幅広い領域を連隊における連携機能として遂行し、諸職種協同における基幹部隊の役割を踏まえた戦闘力の組織化の2点を要望するとともに、隊員各個による主動的な安全確保や自律心による平素の訓練成果の発揮を期待すると述べた。

13普連を基幹とした諸職種で編成された受閲部隊は、防衛行動という命により、6夜7日に渡る訓練状況へと突入した。

陣地に進入した部隊は綿密に防御準備を行い防御戦闘を開始し、情報と火力を連携しつつ、継続的な衛生支援業務により主動的かつ積極的に行動した。雨天や寒暖差で心身も疲労していく中、組織化された戦闘力を粘り強く発揮し、任務遂行能力を向上させた。

本訓練検閲においては旅団長表彰11人、最先任表彰6人が優秀隊員として表彰された。

以下に受賞者のコメントの一部を紹介する。

■旅団長表彰

▼重要な役割である通信を担うことを自覚し、確実・迅速・正確な通信確保を意識した。自身に不足している部分も見えたので今後の教訓としたい。（本管中　櫛引士長）

▼デジタル化が進む中でも、起こりうる不通のためにアナログでの地図判読や徒歩斥候などの能力向上を引き続き練成したい。（本管中　新堂3曹）

▼素直に嬉しい。陸士でもやるべきことを自ら考え行動し続け状況終了を迎えられたことが評価に繋がったと思う。大きな達成感と自信が持てた。（1中　太田士長）

■最先任表彰

▼今までもワンチームで訓練してきた小隊で部隊から後送・収容へと連携した迅速な患者後送ができた。これからも連携した訓練にまい進したい。（本管中　与那嶺3曹）

▼分隊長の企図を継承できるよう常に腹案を練って、分隊全員が任務達成できるよう臨んだ。受賞できたのも分隊や中隊の全員のおかげだと感じる。（3中　小林3曹）

▼継続的な火力のための行動を意識した。火力戦闘部隊として貢献できるよう新領域も意識し、時代についていきたい。（重迫中　占部3曹）



迫撃砲による火力を発揮する13普連



患者の緊急空輸訓練をする衛生科隊員



砲火をあげて目標へ放たれる迫撃砲弾



弾薬準備

重迫中

長距離射撃の練度維持

普通科連隊の任務遂行能力向上

旅団は8月9日から21日までの間、矢臼別演習場において令和8年度野戦特科部隊等射撃訓練に参加した。旅団からは第13普通科連隊を長として、第2普通科連隊と第30普通科連隊の一部を加えた重迫撃砲部隊を編成した。この訓練は第1次旅団訓練検閲に先がけた転地訓練として実施した。

矢臼別演習場という広大な演習場で長射程射撃訓練を行えるのは貴重な機会であり、各連隊の射撃練度をさらに向上させ、任務遂行能力の進歩を図った。

本射撃訓練では試射をはじめ、陣地変換後の転移射撃のほか、発煙弾射撃やドローンでの観測射撃を訓練科目として実施し、長距離射撃における要領を確立した。19日には旅団長が視察し射撃練度を確認した。

旅団は今後もさまざまな訓練を重ね、各種事態への対処能力のさらなる向上に務め、強靭な部隊を創造してゆく。

次世代を担う若鷲巣立つ

特技教育・後期教育終了

旅団は9月中旬までに、第2普通科連隊、第13普通科連隊、第30普通科連隊、第12偵察戦闘大隊、第12施設隊、第12化学防護隊がそれぞれ担任していた後期課程及び特技教育をすべて修了した。

3月末に入隊して約半年、即戦力となるべく仲間とともに、部隊配属に必要な基礎的な知識・技術を日々懸命に積み上げた148人（うち女性8人）の若鷲は、それぞれの職種部隊へと配属された。

今回は教育修了時のコメントを紹介する。（階級は教育修了時のもの）

■第2普通科連隊

▽職種ごとの教育は、初めてのことだらけで大変だったが、区隊長や班長が丁寧に指導してくれたので、確実な技術と知識を学ぶことができた。（多島2士）

■第13普通科連隊

▽約3か月という教育でさまざまなことを学ぶことができた。同期と互いに助け合いながら困難を乗り越えることでチームワークの大切さも学ぶことができた。配属部隊でも教育間のモチベーションを維持しながら頑張りたい。（鈴木2士）

■第12偵察戦闘大隊

▽本教育では体力面、精神面共に自信がついた。普段の体力練成は前期教育のとき以上に追い込むことができ、精神面は仲間と協力し、厳しい訓練を乗り越え成長することができた。（吉川2士）

■第12施設隊

▽自衛隊に入ったことによって、民間など他の会社では経験できない複数人での営内生活や、規律を守ったうえでの団体行動、そして体力練成と、色々なことを経験して心身共に強くなり、自分に自信が付きました。今後の抱負は、自主自律を目標にコツコツと自分磨きをしていきたいです。（田名網2士）

■第12化学防護隊

▽約3か月と時間が限られている中で、さまざまな化学器材や装備品について学ぶことができた。特に除染車では、少しの操作の誤りが重大な事故に繋がることを学んだ。本教育間で学んだことを配属部隊で生かしていく。（中野2士）



偽装した車両から警戒する13普連



狙撃班による射撃



教育終盤の戦闘訓練（２普連）



修了証書の授与（13普連）



ＭＣＶ研修（12偵戦大）



漕舟でのロープワーク（12施設）



検知器材の実習（12化防）

第１施設団

奥団長初度視察

第1施設団の作戦基盤を確認

施設団は9月1日に第307施設隊（宇都宮）、2日に第4施設群（座間）、7日に第306施設隊（松本）及び8日に第5施設群（高田）の初度視察を実施した。

各部隊において儀じょう隊等による出迎えを実施した後、幹部挨拶、状況報告、隊内巡視、隊員との懇談及び訓示を行った。

状況報告では、各部隊の編成・任務、人員・装備現況、教育訓練の概要等について報告が行われた。

また隊内巡視では、各部隊の事務室等の勤務環境、倉庫における各種装備の管理状況のほか、生活隊舎における営内者の生活環境の確認が行われた。

訓示において団長は、隊員の顔が見えるよう隊形を崩して近くに集め、「普段直接会う機会が少ない皆に会えて嬉しく思う」と述べ、「変化する状況に順応していけるよう、統率方針である変化に強い施設部隊の創造を目指すため、隊員それぞれが自分のできる事を極めていって欲しい」と期待を寄せた。

施設団は団長による視察を受け、本視察を通じて示された団長の企図を胸に、変化に強い施設部隊の創造に努めていく。


営内の状況を確認する団長（第５施設群）


儀じょう隊による巡閲（第４施設群）


隊員と懇談する団長（第３０７施設隊）


装備の現況を確認する団長（第３０６施設隊）

新隊員後期教育を修了
同期の絆を胸に新たな一歩

施設団は7月3日から9月13日までの間、古河駐屯地において、新隊員後期教育「施設」を第101施設器材隊が担任・実施した。

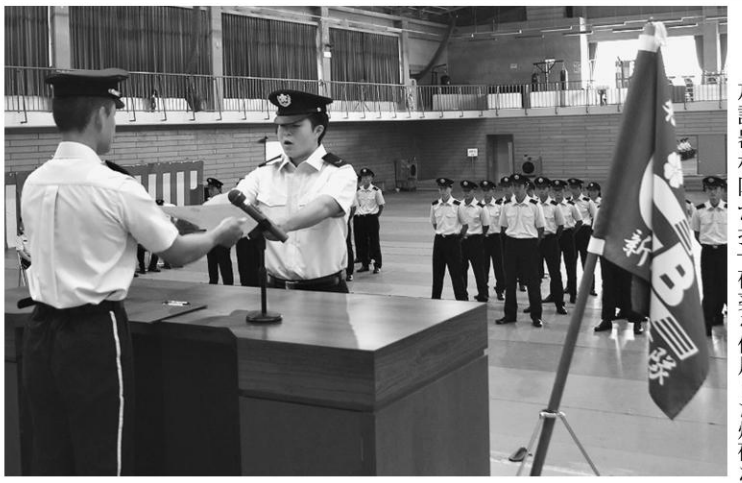
約2カ月半の教育では、綱を使用した連結、重材料の運搬、船を漕ぐ漕舟、爆破薬を使用した爆破などの施設基礎作業を主体に、全ての隊員が施設学校で必要な基礎的知識及び技能を修得した。

9月13日には修了式が挙行され、保護者らが見守る中、区隊旗の返納や優秀隊員の表彰などが執り行われた。

翌日の14日、他駐屯地へ旅立つ新隊員の見送りを古河駐屯地として実施し、教育を実施した区隊長からは、送別の言葉が送られた。

新隊員は担任官である器材隊長の要望事項「情熱を持って学べ」「同期の絆を大切にせよ」の下、一人ひとりが情熱と主体性を持って教育に臨み、同期との絆を深めたかけがえのない教育となった。

施設団は今後も新隊員の育成に力を注いでいく。


優秀隊員の表彰



駐屯地による見送り

施設等防護力強化訓練を実施
変化を問われる第1施設団

施設団は8月25日から28日までの間、朝霞駐屯地において施設等防護力強化訓練を第307施設隊が担任・実施した。

本訓練はドローンへの対処として、施設等の防護力強化、防護要領の有効性を検証するとともに、施設科以外の部隊でも構築可能な要領を確立することを目的として実施した。

本訓練に先立ち、7月上旬から約3週間、古河駐屯地及び宇都宮駐屯地において事前訓練を実施して、万全の態勢で本訓練に臨んだ。

訓練内容は、施設等に侵入を企図するドローンの接近を阻止する要領、侵入したドローンを阻止する要領、ドローンの爆発による天井の崩落を防止し強化する要領、窓ガラスの飛散を防止する要領の4点を実施・検証した。

9月10日には陸上幕僚長による構築物等の視察があり、団長が訓練の状況について報告した。

本訓練における陸上幕僚長の「東部方面隊らしい良い訓練であり、他方面隊にも普及していってもらいたい」という指導に基づき、防護力強化要領について普及を図っていく。

施設団は団長要望事項である「変化に強い施設部隊の創造」のもと、創意工夫に努め、強靭な陸上自衛隊の創造に寄与していく。


陸上幕僚長へ報告する団長

チャド少佐の英語ワンポイントレッスン

日本では「読書の秋・食欲の秋・スポーツの秋」など、秋を楽しむ表現がたくさんあります。一方、アメリカではそのような言い方はあまり一般的ではありません。その代わり、秋から冬にかけては、家族や友人と過ごす大きなイベントが続きます。

10月31日のHalloween!

11月第4木曜のThanksgiving、そしてその翌日から始まるBlack Friday。この時期の街は飾り付けやセールでとてもにぎやかになります。

今回は、そんな秋のイベントでそのまま使える、簡単な英語フレーズを5つ紹介します。

“Happy Halloween!”

「ハロウィンおめでとう！」

ハロウィンの日の定番のあいさつです。

A：Happy Halloween!（ハッピーハロウィン！）

B：Happy Halloween! I like your costume.
（ハッピーハロウィン！その仮装、いいね。）

“Trick or treat!”

「お菓子をくれなきゃ、いたずらするよ！」

子どもたちが家を訪ねるときの決まり文句です。

Child：Trick or treat!
（トリック・オア・トリート！）

Neighbor：Here you go. Enjoy your candy!
（はいどうぞ。お菓子を楽しんでね！）

“Happy Thanksgiving!”

「感謝祭おめでとう！」

家族や友人と感謝祭を祝うときのあいさつです。

A：Happy Thanksgiving!
（ハッピーサンクスギビング！）

B：Thank you! Have a wonderful day with your family.
（ありがとう！家族と素敵な一日を。）

“What are you thankful for?”

「何に感謝していますか？」

感謝祭でよく交わされる質問です。

A：What are you thankful for?
（何に感謝していますか？）

B：I’m thankful for my family and good friends.（家族と大切な友人に感謝しています。）

“It's a great deal!”

「すごくお買い得だ！」

ブラックフライデーの買い物で使う表現です。

A：This jacket is 50% off.
（このジャケット、半額だよ。）

B：Wow! It’s a great deal!
（わあ！すごくお買い得だね！）

秋は国によって楽しみ方が少し違います。アメリカでは季節のイベントを通して、人と集まり、感謝を伝え、買い物を楽しむ文化があります。今回紹介したフレーズは、どれも短く覚えやすく、すぐに使える表現です。

“There is always something to be thankful for.”

「感謝できることは、いつもどこかにある。」

季節の行事をきっかけに、身近な人や日々の出来事への感謝を英語で伝えてみましょう。

東部方面混成団

神奈川県内で台風被害相次ぐ
懸命な人命救助活動を実施


土砂による倒壊家屋からの人命救助活動（初声町）


各機関、民間と連携した人命救助活動（南下浦町）

混成団は9月16日に発生した台風25号に係る災害派遣任務を完遂した。

この台風は神奈川県に21日頃から記録的な豪雨をもたらし、24時間降水量で観測史上1位を記録した。

神奈川県の被害は主に三浦半島に集中し、横須賀市・三浦市等において道路の冠水や土砂崩れ等が相次ぎ、交通インフラの遮断や家屋への土砂被害等が発生した。

これらの被害状況から、9月21日17時46分、神奈川県より自衛隊に対し災害派遣要請が行われ、第1師団長の命令を受け、混成団は第31普通科連隊を主力とし、第4施設群、第117教育大隊の一部を含めて人命救助活動を遂行するとともに、自治体へのLO派遣、指揮所活動及び東部方面後方支援隊等の支援を受け災害派遣部隊の器材整備等の後方支援を行った。

人命救助活動では、9月21日から27日の7日間、警察、消防等の各機関と連携しつつ、道路啓開、土砂の掘削・除去及び行方不明者の捜索救助を行い、27日の発見をもって、神奈川県から撤収要請が発出され、同時刻をもって全ての災害派遣活動を終了した。

混成団は引き続き関係機関との連携を密にし、各種災害への即応態勢を維持して、国民の安心安全に寄与してゆく。


土砂の掘削除去を行う隊員


樹木の伐採を行う31普連


地元消防団と協同した瓦礫の撤去


消防と協同での土砂除去作業

自らを鍛え仲間を支える
次代を担う陸曹候補生

女性自衛官教育隊は9月、東富士演習場において、約3ヶ月の教育訓練の集大成として第109期陸曹候補生課程による総合訓練を実施した。

候補生は、陸曹として部下を率いるために必要な判断力、行動力、責任感の向上を図るなど、これまで培ってきた知識や技能を実際的な環境で発揮し、初級陸曹として求められる総合的な能力の開花を見せた。

昼間及び夜間に行われた偵察で分隊長役の候補生は、周辺の状況を的確に掌握・収集した情報を整理し小隊長へ報告した。その後、下達された命令に基づき分隊命令を各分隊員に対して的確に下達するなど、これまでの教育・訓練の成果を随所に見せた。

翌日の敵陣地に対する攻撃では、互いに声をかけ士気を高め、重量のある装備を携行した同期を支え合いながら、支援火力の最終弾とともに果敢に陣地へと突入し、任務を達成した。

互いに切磋琢磨しつつ、厳しい訓練を同期で協力し助け合いながら乗り越えた総合訓練の経験は、初級陸曹として部隊の中核を担うための確かな糧となっただろう。


偵察結果の報告を行う分隊長


目標に突入する候補生

総監部人事部募集課 募集ニュース

採用広報要員集合教育

方面総監部は令和7年度から8年度にかけ、東方管内の各都県1か所を基準として採用広報要員集合教育という事業を開始した。本教育は各駐屯地・基地の広報担当者や広報官希望者を対象に、各駐屯地等で開催される記念行事や地方協力本部主催のイベントなどにおいて、効果的な採用広報を実施するために必要な広報手法の習得を目的としており、採用広報の概要や自らの言葉で自衛隊の魅力を伝えるための手法を学び、採用情報を獲得するための能力向上を図った。これまでに陸自の高田、相馬原、土浦、木更津駐屯地に加え、空自入間基地、海自横須賀基地で本教育を実施し、受講後は部内外の各種イベントで、多くの若者に自衛隊の魅力を自らの言葉で伝えるとともに、地方協力本部と連携して志願化に繋げる活躍を見せている。

教育は三段階に区分して行われ、当初は座学を中心に、募集の意義から地方協力本部の編成、募集活動の年間サイクルの流れ、採用の現状、採用広報の活動状況、そして、教育受講者の活躍ぶりを紹介した。続いて実習形式に移り、参加者自身の経験等を踏まえ、自衛隊及び各職種の特性を分析し、魅力を伝えることを着眼にしたストーリーをそれぞれ発表し合い、十人十色の経験や視点によるさまざまな表現方法を共有した。最後に現職広報官が募集対象者役となり、ケース別のロールプレイ方式による本番さながらの実習を実施し、相手のニーズに応じて自分自身の言葉で自衛隊の魅力を話す技術を体験した。

参加者からは「部外者に自衛隊・職種の魅力を説明する難しさを痛感し、日頃から魅力を理解し整理をすることが重要だと感じた」「本教育で学んだことを生かし、駐屯地イベントで積極的に活動したい」などの前向きな声が聞かれ、今後の採用広報への意欲を高める良い機会となった。

方面総監部は引き続き他の駐屯地・基地で教育開催を進めるとともに、同教育を地方協力本部主催へと拡大していき、各隊員が生き生きと自衛隊の魅力を発信し、共に国防の任に就く仲間を増やしていきたい。


空自入間基地（総合実習）


海自横須賀基地（Gp実習）


海自横須賀基地（総合実習）


相馬原駐屯地（Gp実習）


高田駐屯地（総合実習）


土浦駐屯地（Gp実習）

シ通群

新隊員の挑戦

基本特技取得を目指す

東部方面システム通信群は、7月1日に新隊員特技課程及び一般陸曹候補生課程後期教育の１０9人を迎え、7月3日からシステム通信科隊員としての基本特技取得を目指し約3か月の教育を開始した。

教育開始当初の7月は基礎教育をメインに、システム通信に関する通信関係規則、通信に関する専門用語、システムの構成について学んだ。一つ一つの課目をクリアし知識を習得するたびに、システム通信科隊員としての意識が芽生え、一歩一歩確実に成長してきた。

さらに8月には、システム通信器材の取り扱いを開始した。初めて触る通信器材に戸惑いながらも、教官の説明を真剣に聞き、一つ一つの手順を確認して、繰り返し反復練習を重ねてきた。

そして9月からは班組訓練へ移行し他組員と連携しながら取り組む中で、基礎教育や器材の取り扱いで得た知識を定着させ、地道な練成と技能を身につける大切さを学び、猛暑にも負けずに取り組む本野外訓練を通じて、分からない部分を教え合うなど、同期同士で操作要領を確認し合い、互いに切磋琢磨しながら、技術の向上を目指してきた。

教育の集大成として、9月下旬に総合訓練を実施し、これまでの教育で培った識能をもって全力で臨んだ。総合訓練を終え、システム通信に関する知識をさらに深め、通信技能を体得し、群長要望事項の「同期の絆を大切にせよ」「基本特技を確実に習得せよ」の2点を胸に、一人一人が「部隊の通信を担う」という自覚と、基本特技を取得するという最終目標を目指し邁進していく。


通信線の構成


通信所の開設


空中線の設置

特科連隊

野戦特科部隊等射撃訓練

矢臼別演習場で 練度向上

東部方面特科連隊第1大隊は8月2日から23日までの間、北海道の矢臼別演習場において実施された、野戦特科部隊等射撃訓練に情報中隊及び東部方面後方支援隊第３０６特科直接支援中隊とともに訓練に参加した。

本訓練において第1大隊は、大隊本部、本部管理中隊及び第2中隊を基幹部隊として8月2日以降北富士駐屯地を順次出発し、仙台港及び八戸港の2海路を使用して北海道へ移動、8月10日矢臼別演習場までの機動を整々と完了した。

良好な訓練基盤を活用して１５５㎜榴弾砲ＦＨ-70の実射訓練及び戦術行動を練成するとともに、大隊独自のシナリオに基づき、島しょ防衛に任ずる特科大隊としてのレジリエンスの確保を意識した部隊行動を演練した。


射撃要求、弾着予告を実施するＦＤＣ


速度と精度を追求した射撃を行う第２中隊

特に戦術行動については、レジリエンスを確保するため、広域にわたる分散・偽装、ドローン対処要領等の練度を向上した。

実射訓練においては、3日間の射撃訓練基盤を存分に活用し長射程射撃という特性を踏まえた、精度・速度を追求した射弾の判定・修正及び射撃諸元の算定を練成するとともに戦砲隊は徹底した安全管理の下、射撃精度・速度の向上に努めた。また通信小隊は広大な地域においても必通の信念を貫き通信の構成・維持運営を追求し、これにより各機能の能力を弾先に集中させ、長射程射撃における大隊の射撃練度を大きく向上させることができた。

第1大隊は方面隊唯一の火力戦闘部隊である特科連隊の骨幹として、射撃実行部隊としての誇りをもち、新しい戦い方に適応しつつ、引き続き練度の向上に邁進する。

後支隊

陸曹候補生課程履修前教育

富士で 識能を 磨く

東部方面後方支援隊は8月31日から9月11日までの間、富士駐屯地において、陸曹候補生並びに一般陸曹候補生課程履修予定者9人に対して、令和8年度（前期）陸曹候補生課程履修前教育を実施した。

本教育は富士教育直接支援大隊が担任、大隊の最先任上級曹長を教育隊長として指導部を編成し、陸曹候補生として必要な共通的識能の向上及び資質の涵養を目的に、精神教育、学科教育、野外訓練及び総合訓練が実施された。

教育の中盤には、障害走、戦闘訓練、訓練指導法など多岐にわたる課目が実施され、陸曹候補生は互いに切磋琢磨し、困難な課題を克服するとともに、一致団結し、日々の訓練を通じて、識能の向上を図り、同期の絆を深めていった。

総合訓練では東富士演習場において、前衛班の行動、徒歩行進間の警戒及び分隊の攻撃等一連の行動について演練し、これまでの教育で修得した識能を遺憾なく発揮して任務完遂し、陸曹候補生課程に入校するための基礎を確立した。

教育に参加した第１０３補給大隊 米村士長は、「履修前教育を終えて、特に戦闘訓練が印象的でした。戦闘訓練では、周囲の状況を把握しつつ、仲間との連携を維持しながら前進していくことの難しさを感じました。この教育で修得した経験を生かし、陸曹候補生課程では、困難なことにも積極的に挑戦し、陸曹として必要な指揮能力と責任感を身につけ、信頼される陸曹を目指します」と所感を述べた。

本教育で培った知識と技能を今後の陸曹候補生課程において十分に発揮し、将来、後方支援隊の中核を担う陸曹としての活躍に期待する。


本番に準じた障害走教育


躍進する隊員


命令を下達する隊員

音楽隊

第86回定期演奏会

紡ぐ～祈り～

東部方面音楽隊は9月4日、東京芸術劇場（池袋）コンサートホールにおいて第86回定期演奏会を実施した。

例年東京文化会館（上野）で実施している本演奏会だが、会場の改修工事のため、場所を移しての開催となった。東京芸術劇場での開催は、２０１９年の第72回定期演奏会以来7年ぶりとなる。

当日は平日夜間にも関わらず、一般応募者のほか、日頃から自衛隊へご理解ご協力を頂いている関係諸団体等の招待者が多く詰めかけた。

紡ぐ～祈り～をテーマとした本演奏会は、国歌「君が代」の四部合唱、令和8年熊本地震犠牲者に対する哀悼の念を表した「アメージンググレイス」から幕開けし、第1部は邦人作品を、第2部はイギリス人作曲家作品を取り上げた。特に第2部第1曲にはジョン・ゴーランド作曲「ユーフォニアム協奏曲」を隊員の独奏により披露し、ユーフォニアムならではの甘美な響きと奏者の超絶技巧で聴衆に深い感銘を与え、高い称賛を得た。アンコールでは東日本大震災被災者のために制作されたチャリティーソング「花は咲く」と、陸上自衛隊創隊10周年を記念して作られた自衛隊歌「この国は」を歌付きで演奏し、各種災害の被災地に思いを寄せて愛郷の心の涵養を図るとともに、自衛隊へのさらなる理解協力の気運促進を図った。


「ユーフォニアム協奏曲」の独奏


会場となった東京芸術劇場（池袋）

静岡地本

女性自衛官のリアル体感
女性限定職場見学ツアー

自衛隊静岡地方協力本部は8月20日、東富士演習場及び富士駐屯地で、中学生以上の女性とその保護者を対象とした「女性限定職場見学バスツアー」を開催し、21人が参加した。

ツアーでは参加者が陸自の3・1／2tトラックに乗って東富士演習場へ移動し、野戦特科幹部初級課程による実射訓練を見学した。

19式装輪自走155㎜りゅう弾砲による射撃や、高台で双眼鏡を使っての観測、指揮所で連携して任務にあたる様子など、迫力ある訓練を間近で見学した。

訓練後には女性幹部自衛官との懇談を実施して、入隊のきっかけや現在の仕事内容、やりがいなど、自身の経験を交えた話に、参加者は熱心に耳を傾けた。第一線で活躍する女性隊員の活動に触れ、自衛隊で働くことをより身近に感じる機会となった。

富士駐屯地では隊員食堂での体験喫食をはじめ、整備工場や生活隊舎モデルルームの見学、戦車回収車への体験試乗などを実施し、勤務だけでなく、生活環境についても実際に見学することで、女性隊員が安心して勤務できる環境への理解を深めた。

女性隊員との懇談では、演習時のトイレや生活面、仕事とプライベートの両立、恋愛や結婚など、同性だからこそ相談しやすい質問も多く寄せられた。隊員は一つ一つの質問に丁寧に答え、女性がさまざまな職種で能力を発揮し、それぞれのライフステージに応じながら活躍していることを伝えた。

静岡地本は今後も女性が安心して自衛官という進路を考えられる機会を設け、自衛隊の仕事や職場環境への理解を深める広報活動を進めていく。



女性自衛官のリアルな言葉に熱心に耳を傾ける参加女性



神奈川地本

一通のメールが縁に
写真部員が基地見学

自衛隊神奈川地方協力本部は海上自衛隊横須賀地方総監部の協力を得て、明治大学生田キャンパスの写真技術研究部を対象とした基地見学を実施した。

今回の見学は溝の口募集案内所の広報官が、同部のサークル用メールアドレスに自衛隊を紹介するメールを送ったことがきっかけとなった。これに対し、同部から「ぜひ見たことのない世界を見たい」と見学を希望する返信があり、横須賀地方総監部との調整を経て実現した。9月14日、同部のイベントとしては過去最多となる23人の学生が参加した。

横須賀地方総監との懇談では、艦艇の建造期間や情報工学の知識を生かせる職種など、学生の関心に基づく質問が相次いだ。また、海上自衛隊の写真員との懇談では、職務内容や海外での活動について説明を受けた。広報用写真の撮影や空撮など、写真技術研究部ならではの専門的な質問も寄せられ、学生たちは写真の知識や技術が自衛隊の活動に生かされていることを学んだ。

オーシャンビューの隊員食堂で体験喫食を行ったほか、えい船での体験航海も実施した。学生たちは、間近に見える護衛艦や潜水艦を盛んに撮影し、普段の学生生活では触れる機会の少ない海上自衛隊の活動や施設を体感した。

参加した学生からは、「自衛隊＝『筋トレ』『過酷』というイメージが変わった」「さまざまな職種の隊員がいることを知ることができた」「写真専門職種があることに驚いた」といった感想が寄せられた。今回の見学は、自衛隊に対する従来のイメージを見つめ直し、その役割や多様な職種への理解と関心を深める機会となった。

神奈川地本は今回のつながりを今後の広報活動にも生かし、大学や学生団体への情報発信を継続するとともに、部隊と連携した見学やイベントを通じて、自衛隊を知る機会の拡充に努めていく。



横須賀地方総監と和やかな雰囲気での懇談

群馬地本

地域で学ぶ防災体験
命を守る知恵を伝える



子どもに丁寧に結び方を教える隊員

自衛隊群馬地方協力本部は8月1日、伊勢崎豊受小学校・伊勢崎第四中学校PTA連合会からの依頼を受け、伊勢崎第四中学校で開催された防災イベントに参加し、防災教育を支援した。

このイベントは「子どもたちと一緒に災害を学び、将来は地域でリーダーシップを発揮できる人に育ってほしい」との願いを込めてPTA、自治会、学校、市役所などが連携して企画したものであり、子どもたちや保護者、地域住民らが参加し、防災について理解を深めた。

開会式では群馬県危機管理課防災対策主監による来賓挨拶に続き、群馬地本本部長が挨拶を行った。

その後、自衛隊と伊勢崎市防災危機管理課が連携して防災講話を実施し、過去の災害派遣で培った経験をもとに、災害発生時の行動や日頃からの備えの大切さを伝えた。

体育館ではロープワークや応急担架作成などの体験コーナーを開設して、隊員が子どもたち一人一人に結び方を丁寧に教え、実際に手を動かしながら防災に役立つ技術を学んだ。子どもたちからは「難しかったけど、できるようになってうれしい」「家でもやってみたい」といった声が聞かれ、楽しみながら防災の知識を身につけていた。

校庭では第12後方支援隊の支援を受け、野外炊事によるカレーライス約300食の喫食体験や野外入浴セット「かんなの湯」の体験、災害派遣車両の展示を実施した。

参加者からは「すごくおいしくて、おかわりしました」「災害時でも温かいご飯が食べられることを知りました」とカレーが好評だったほか、「お風呂が大きくてびっくりした」「水風呂もあって最高でした」と野外入浴体験にも笑顔が広がった。

今回の防災イベントは、地域と自衛隊が連携し、体験を通じて防災を学ぶ貴重な機会となった。

群馬地本は今後も、地域や関係機関と協力しながら、防災意識の向上と次世代への防災教育につながる広報活動を進めていく。

茨城地本

駅で出会う自衛隊
約1200人が来場

自衛隊茨城地方協力本部は9月16日から17日までの間、JR土浦駅において「土浦駅サテライトブース」を開設した。延べ約1200人が来場し、自衛隊の活動に触れる機会となった。

今回の開設に当たっては関東補給処航空部及び調達会計部からリクルーター隊員の派遣を受け、ブースへの呼び込みや茨城地本公式キャラクター「にゃっとら」の着ぐるみ運営などを実施した。派遣された隊員は、当初こそ慣れない様子も見られたが、次第に来場者への声掛けや説明にも慣れ、足を止めた人と熱心に話し込む姿も見られた。

ブースには陸上自衛隊の背のう体験や迷彩服試着体験、航空自衛隊のVR体験、海上自衛隊の南極の氷の展示など、各自衛隊の特色を生かした企画を用意した。来場者は実際に見て、触れて、体験することを通じて、自衛隊への理解を深めていた。

また人気を集めたガチャポンでは、特別賞を引き当てた来場者に「オリジナルドッグタグキーホルダー」をプレゼントした。受賞者からは「これ本当に無料なの？」「めちゃくちゃ嬉しい」といった喜びの声が上がり、ブースは終始にぎわいを見せた。

茨城地本は今後も地域に密着した広報活動を継続し、さまざまな機会を通じて、一人でも多くの人に自衛隊を知ってもらい、その活動への理解と関心を深めてもらえるよう地本一丸となって努めていく。



VR体験で自衛隊の活動を模擬体験

訓練所感

第2高射特科群 第335高射中隊 築瀬 昌弘 3等陸尉

私は10月6日から14日までの間、米国ニューメキシコ州マクレガー射場において実施される令和8年度中SAM部隊実射訓練に参加します。

本訓練は基礎となる部隊である中SAM中隊の陣地の占領から、日本国内では実施できない対空実射までの一連の行動について、その練度を評価・判定するとともに、じ後の進歩・向上を促すものです。

私は令和8年3月に第335高射中隊へ異動となり、副射撃小隊長として、本訓練に参加することになりました。幹部に任官して初めての対空実射訓練に、漠然とした不安を抱えるとともに、慣れない部隊、業務に翻弄されながら、訓練を両立することは、私にとって至難の業でしたが、上司・同僚の力添えもあり、いつ、いかなる任務にも即応できるよう訓練を、段階的かつ計画的に実施することで、不安が徐々に消え、渡米する日が待ち遠しくなりました。

引き続き渡米する直前まで訓練は続きますが、中隊の目標を達成するため、準備を万全にして対空実射訓練に挑みたいと思います。

最後に、このような訓練に参加できる貴重な機会を与えていただいたこと、訓練間支援していただいた群本部、各中隊、高射DS及び隊員家族の皆様に心から感謝いたします。



最先任上級曹長

「一里塚」

東部方面混成団

朝倉 聡 准陸尉



東部方面混成団第９代最先任上級曹長の朝倉准尉です。まずは、この場をお借りしまして日頃から東部方面混成団の各部隊にご支援・ご協力をいただいておりますことに対し、厚く御礼申し上げます。特に、教育部隊が担任する基本教育におきましては、それぞれのレベルごとに必要とされる基礎的な知識及び技能を修得させ、陸上自衛官としての基本基礎を確立できるよう鋭意教育を行っておりますが、本教育任務を達成するには、本属の教育要員に加え、各部隊の優秀な教官、助教のご支援が不可欠であり、今後も強靭な東部方面隊の創造に寄与するため、ご高配のほどをお願い致します。

今回のあづまへの寄稿のお話をいただいた際、「到頭順番が来たか！」と思いました。これまでこのコーナーに先任准尉課程の同期が寄稿しているのを拝読しておりましたが、思いを語り無事に定年を迎える者、また更に上級部隊の先任上級曹長等へと活躍の場を広げて行く者など、さまざまな内容に触れ同期の皆と語り合った最先任上級曹長として勤務するに当たっての初心を思い出していました。

その初心を一言で表すものが今回のテーマである「一里塚」です。当時の先任准尉課程においては、各期ごとにシンボルマークと隊歌を作っており、そのマークと隊歌の主題として同期と話し合って採用したキーワードが一里塚でした。いくつもの候補の中からこれを採用した理由の1つがその由来です。一里塚とは「江戸時代に主要な街道に日本橋を起点として1里ごとに築かれた土盛りの目印」であることから、新たに確立された最先任上級曹長制度の起点となる本課程の第1期生として、私たちがその目印(指標)を示し、次なる卒業生達が迷わずに進んで行けるような最先任上級曹長に成長していくという思いを込め、皆でこの言葉を選びました。

その同期達と一度実際の一里塚を見に行こうと観光も兼ねて訪れた際、江戸時代から長きにわたりその場に鎮座し、行き交う人々の目印としての役割を果たし、当時の人々が、進む道の正しさを確認したり、休息時に安心感を与えたであろうとの想像が掻き立てられる重厚な風貌と貫禄に感動を覚えました。

私自身も最先任上級曹長として、後に続く隊員の指標になれるよう、「挑戦し続けている限り、失敗ではない」と肝銘しさまざまなことに挑戦し続けるとともに、若い隊員たちが安心して挑戦できる環境を醸成できるよう微力ながらも努力して参りますので、引き続き、ご指導・ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い致します。

フェアレディー

「日々成長」

第１施設大隊

大塚 幸祈 陸士長

今回のフェアレディは第1施設大隊の大塚士長です。大塚士長は令和6年に入隊し、栃木県宇都宮市出身の20歳です。

Q 入隊の動機は?

父と姉が自衛官で自分も父と姉のような自衛官になり、災害派遣等で国民の役に立ちたいと思ったことがきっかけです。

Q 現在の職種とその職種を希望した理由は?

職種は施設科です。希望した理由は災害派遣等で施設器材を使用し、救助活動をしている姿を見たことがあります。そのような任務は国民の役に立つものであり、やりがいや誇りをもって取り組むことができると考えたからです。



Q 普段行っている業務とその魅力は?

普段は訓練等で使用した器材の整備を行っています。器材整備を通じて、器材自体や整備要領について知ることができ、勉強になっています。また銃剣道練成隊に所属しており、練成に励んでいます。日々の練成でできる技が増え、自分が強くなれることがとても楽しく、体力も付きます。

Q これまでで最も思い出深い訓練は?

部隊配属後すぐに参加した中隊検閲での地下指揮所の構築です。訓練検閲という状況下で施設科の任務の中でもきついと言われている地下指揮所を構築しました。今まで感じたことのない疲労感と完成した時の達成感がとても思い出に残っています。

Q 学生時代取り組んでいたものは?

中学生の時はバスケットボールに所属していました。高校生になってからはアルバイトに打ち込んでいました。

Q 休日は何をして過ごしていますか?

美味しい食べ物を探すことが好きで、美味しい物をたくさん食べています。食べることで幸せを得ています。

Q 趣味は?

旅行と野球観戦です。きっかけは初めて飛行機で福岡に行ったときにワクワクしてとても楽しく、それから趣味になりました。野球は幼い頃からプロ野球を観ることが好きで、ジャイアンツファンです。

Q 今後の目標と抱負は?

「凡事徹底」をモットーに、施設科としての基本・基礎を実行し、徹底できる立派な陸曹になります!また銃剣道でも優秀な成績を残せるように日々練成に励んでいきたいです!

Q 最後に一言

立派な陸曹になりたいです!そして男性隊員にも負けないくらいの屈強な施設科WACになれるよう日々成長していきます。

マイファミリー

「妻のお仕事」

第３０７施設隊

２等陸曹

鈴木　伸幸



私は第1施設団第307施設隊で勤務している鈴木2曹です。現在は栃木県小山市に自宅を構え、妻、長女、次女、もうすぐ2歳になる三女と5人家族で暮らしています。妻は約10年前まで自衛官として勤務していましたが諸事情により一度退職をし、民間の企業で働いていました。しかしある日、何を思ったのか「自衛隊に戻る」と言い出し、私も大変驚かされたのを今でも覚えています。一方で、妻を応援したい気持ちももちろんあり、入隊に賛成したところ、再任用の制度により無事に入隊することができました。

日々、子育てと家事を分担しながら共に自衛官として勤務しています。そのような中で妻が陸曹候補生になるため勉強や体力練成をする時間は、主に私が子供の面倒を見ていました。周囲の支えもあり、無事に1次試験・2次試験と合格して晴れて令和8年2月に候補生の指定をいただき、妻は現在、女性自衛官教育隊の「陸曹候補生課程」に入校中です。

妻が不在となる間、最初に直面した問題が、仕事をしつつ一人で子育てと家事を実施しなければならない事でした。朝は5時に起き、洗濯物を干して子供たちの朝ご飯を作り、三女の保育園準備をして子供たちを起こし、食事をさせてから自分の準備をして保育園へ送り、出勤していました。帰りは保育園の時間もあり、急ぎ足で迎えに行き、晩ご飯の買い物を済ませ帰宅し、晩ご飯を作っていました。掃除については週末にしかできない状態でした。特に苦労したのは晩ご飯のメニューを考える事です。時短料理を得意とする私の腕前では、レパートリーが乏しく、子供達を満足させる料理を作るのに本を見たりしながら料理をしました。

家事や育児の大変さを感じながら、入校中の妻に感謝しつつ現在も奮闘しています。私は中期実員管理で北海道に3年間単身赴任をしており、当時の妻も今の私と同じ気持ちだったのではないかと思っています。今後は入校中の妻の帰りを待ちながら、自分のスキル(料理・掃除)を磨きつつ、イクメンパパを目指して子供達と向き合いながら仕事と家庭を両立させていきたいと思います。

編集後記

9月4日、池袋にある東京芸術劇場において、東部方面音楽隊による第86回定期演奏会が大盛況のまま終了しました。盛況の陰には演奏・演出の素晴らしさもありましたが、『さすが自衛隊』と感じさせた会場運営も少なからず影響しているものと思います。

東部方面音楽隊はあらゆる機会を通じ演奏・演出・会場運営の能力について段階的に練度向上を図っています。なかでも自ら会場運営を実施できる機会は年に数回であり、非常に限定的です。その限られた機会において警務・保全部隊と連携し支援要員とともに受付業務を主軸に一斉検索・手荷物検査を含め実施できたことが鑑賞に集中できた要因の一つではないかと演奏会を通じ共に業務を実施して感じることができました。

私自身、あらゆる場面で自衛隊による音楽演奏を聴くたびに、何故、毎回毎回こんなにも感動を与える演奏ができるのか常々疑問に思っていた為、AIに問い合わせてみたところ、『音楽隊の多くの隊員が音大出身者や専門教育を受けており、高い演奏技術を保有する隊員による「圧倒的な演奏」と、過酷な任務を支え国民に寄り添う「強い使命感」が融合しているからこそ技術的な完成度だけでなく、聴く者の心に直接響く力を持っている』とAIによる一般的回答を得ました。このAI回答から私なりに分析をすると、部外音楽チームとの大きな違いは前述の「強い使命感」を保持した奏者の集団が自衛隊音楽隊であり、他国の軍楽隊にも通ずる要素であるとの結論に至りました。「強い使命感」は無形の戦闘力でありますし、そのバックボーンは間違いなく自衛隊員という側面であり、国防を主軸として日々研鑽している中、今回の定期演奏会の会場運営における整斉とした一斉検索・手荷物検査・受付等の要領は、東方直轄音楽隊としての演奏・演出の底支えであると感じました。

東部方面音楽隊は次年度、訓練検閲を控えており、AI引用にはなりますが「圧倒的な演奏」と「強い使命感」をもって国民の親近感を更に得られることを期待しています。